

革命とは何か

——「経済学批判」体系の meta-narrative ——

揚 武 雄

The philosophers have only interpreted the world in various ways, but the point is to alter / change it. (Thesis on Feuerbach, 1845)

史上これに類する言葉を身をもって実践し、“ここがロドス”とばかりにルビコンを渡った者は神話に登場する人物まで含めれば枚挙にいとまがなかろうし、天命を受けて易姓革命に身をささげた列伝に登場する英雄たちもその榮譽に浴したことであろう。それにしてもこの警句は、パルテノン神殿に聖哲と並んで自らも祭られたいとするレベルの野心家に吐ける言葉ではなく、「知の考古学」によって掘り起こされる人類の知的営み・観念諸形態のみならず、歴史そのものを解体 *discontra* する決意なくしてはできぬ相談であろう。とすれば、“地獄への道は善意で敷き詰められている”——自ら愛好したアフォーリズムが自分に向けられても気分を害することもあるまい。知の歴史と歴史そのものを飲み込み解体する思想 *magic* の使い手は悪魔に買収された *pessimist* それとも「善悪の彼岸」を地で行く *Über-Mensch* か？ 小論は「経済学批判体系」の検討を通してその素顔に迫ることを企図している。

- ① 何故経済学が批判の対象に選ばれなければならなかったのか〔“何故ロシアがマルクスの革命候補地に選ばれなければならなかったのか、再度 counter-revolution を必要とするなら”——エリツェン〕
- ② 次いで否定疑問ではなく直接疑問形式で“「経済学批判体系」は経済学か？”
- ③ 経済学でないとすればそれは一体何か？ *Denn was ist das?*

解釈の枠内を彷徨してきた哲学に最後通牒を突きつけた自身の実践哲学とて超理性的仮想空間における出来事、現実に移植し得ない *Paradoxical* な思考物 *Gedanke* ではなかったか？ 架橋の演繹に抜かりはなかったか？

(一) 「価値」論に付託されるもの

マルクスの革命の源流は、経済学批判体系に於ける始原概念——商品から発出する。自ら商品概念をして“形而上学的、奇怪な行動をとる”と表現したように、それは3つのディメンジョンから造成される。

商品価値はまずは具体的・実在的労働を否定・捨象した「労働一般」の对象的形態として、次いで平等と正義の観念諸形態（イデオロギーの本義）としてではなくブルジョア的「平等と正義」観念の物的・実在的メタファ、最後に自分の額に刻まれていながら、人の知性だけでなく価値概

念自身に拠っても解説し得ない絶対者の意向を伝達するメッセンジャーとして、理論的な批判ではビクともしない現存システムを解体する道を開く任務を付託された概念である。

① ブルジョア的「平等と正義」のシステムを否定する手立てとして、その観念 *ideologie* のメタファもしくは *symbol* として、商品交換が前提する人々の「平等」感覚・観念を商品自身が分かち持つ「労働の同等性」すなわち「労働一般」が抽出される。

② 「労働一般」は抽象的観念の内に“可能的交換”を内包し、それが交換される物つまり「社会的物」である商品に「体化」「対象化」されて有る場合、“可能的交換”から現実的交換の根拠と見なすことが可能となる。（これは労働を所有権の法原〔正義〕と見なす自然法に準拠して、交換価値の根拠に「対象化された労働」を指定するのと同義だ）。商品体の内に有って価格＝交換価値を規制する「対象化された労働」の働きを「価値」と名づけるとすれば、価値は客観的に実在する価格の原因で有るから、それ自身も客観的に存在する概念となる。

このように単なる実体〔対象化された労働〕から区別されて現実的交換の原因に成った時が価値概念の誕生である。その成果は交換価値すなわち貨幣価格を規制するのが労働一般である、とする判断が単なる分析者のそれではなく、事象それ自体〔商品〕についての“真なる判断”、価格の真の *real* 尺度が労働量である、とする判断が事象それ自体の“内的 *innerlich* 尺度”になったことを意味する。ただし自然言語を用いた分析的方法では労働と価値は区別できず、その差異 *X* を捕足することができないから、上記命題の論証は「商品語」を用いた超越論的方法、「事実による検証」に拠ることは出来ず商品価値自らが「分析」し展開する「形態論」的展開すなわち「絶対的方法」となる。

③ 純粹に理性・「一般意思」の意図的産物とは見なしえない自生的秩序 *spontaneous order* (ハイエク) ——自然言語や金属貨幣——の下で価値が価格を規制するとは価格が商品価値に帰属すること、価値が価格領有権を持つ主体で有ることを意味し、それに伴い人格に固有な所有権、物権が人の手を離れて商品（価値）の側に移転してしまう。したがって、価値論とは「交換価値を規制する原理」の抽出に終わるのではなく、はるかそれ以上のパースペクティブを内包した事柄——ここでは「商品（価値）／物件 *Sache*」を指す——の方が人間を支配するといった事態が引き出されるのだ。

ブルジョア的「平等と正義」観念のメタファである商品生産システムの否定、単にその可能だけではなくその現実性が引き出されてくるのは、理論的・イデオロギー批判からではなく現実の商品生産流通の“概念的把握”（存在＝概念）からであって、商品自身が人の労働の生産物に対する所有権・正義を剥奪して平等と正義が根底から否定されているのを見出すとき、初めて「平等と正義」の根底にある人格・人権がすでに破壊（もぬけの殻・傀儡）されていることが帰結されるのであり、それゆにその根底に有る人格の回復・再建はこの欺瞞的な平等と正義のメタファでもある商品生産を廃絶することによって可能になるのであって理論闘争次元にあるのではない。

以上、ブルジョア的正義の *symbol* である商品交換の下で、「労働の価値」収奪・「分配の不正義」を意味する不正義と異なり、「交換的正義」の“否定”を見出すこの透見 *Einsicht* は、通常の実証分析から得られる判断ではないだけに常識に真っ向から抵触するが、超越論的分析から得られた形而上学的言説は仮想空間 *virtual reality* における出来事、したがって一つのメタ「解

積・物語であることを忘れてはならない。ラディカルな革命の地平は通常の実証分析から引き出しうるものではないからだ。

(1) 分析命題と超越論的「分析」命題

「商品は人間労働の対象化されたものとしては価値である」(命題①)

まずは価値概念 concept に精霊 Geist, 生気を吹き込むことが先決だ。

「われわれが、価値としては商品は人間労働の単なる凝固体であるといえ、その分析は商品を価値抽象に還元するけれども、商品にその自然形態とは異なる価値形態を与えはしない。一商品他の商品に対する価値関係の中ではそうではない。ここではその商品の価値性格が、他の商品に対するその商品の関連によって、現れ出るのである。」(命題②訳文は資本論翻訳委員会, 新日本出版社)

その例解:「商品価値の分析が先にわれわれに語った一切のことを、リンネルが上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただしリンネルは自分だけに通じる言葉——商品語でその思いを打ち明けるのだ。」

「われわれの分析が証明したように、商品の価値形態または価値表現は商品の本性 Natur から生じるのであって、…」(下線は引用者のもの)

分析①は主語の外に述語がはみ出しており、人間労働一般に更なる規定が加わらなければ述語の価値の何性 was は不十分であり、「人間労働は価値を形成するけれども価値ではない。それは凝固状態において、対象的形態において価値なる」といわれても、命題①に於ける「価値」観念の何性 was, つまり対象的形態にある労働に価値なる名称が与えられたところで、どうして労働観念から「価値」概念が区別されるのか不鮮明であることに変わりはない。

命題①の前身「交換価値としては、全ての商品は一定量の凝固した労働時間」(『経済学批判』)——は“不正確であるばかりか誤り”として放棄されたものだが、この命題で主張したいことが「交換価値を規制する原理」は労働であるということなら、それはそれで観察データを用いて検証すれば済むことであり認識論上の問題ではなく確認されなければ仮説として提起するのを断念すればよいだけのこと、科学では日常茶飯事で話題にもならぬことである。とすれば命題②で企図とされていることは何か? 労働と価値の区別として持ち出される「対象性」はどのように両概念を区別するというのか? 交換価値を分析・抽象して「労働一般」を抽出しても、抽出されてくるのはまさに労働一般であって交換価値、すなわち「商品を生産する労働」という特性はすり抜けて抽出されては来ない。まさに抽象のなせる業である。(「経済学と何の関係もない事柄が解決されなければならなかった。それは科学の方法…」とは、最大の仕打ちである黙殺という包圍網を突破するため著者からの要請を受けてエンゲルスが筆を執った『経済学批判』への書評の一節だが、無神論・革命の世紀の雰囲気も掉差して形而上学的方法を“科学の方法”と読み替える共犯者に形而上学には無縁のrealistを押しやった格好だ。このつけから生涯、『資本論』第三巻の編集を含めて解放されることはなかった。)

この対象性 Gegenständlichkeit への傾注は、抽象によってすり抜けてしまう「商品を生産する労働」を丸ごと捕獲することを狙っている。どうしてそれを狙うかといえ、抽象概念〔労働一般〕は「一定量の対象化された労働時間としてただ考えられていたすぎないあいだは、理論

的」〔同上〕に過ぎず、それだけでは商品概念の現実性は確保されないと考えられていることを意味する。この抽象の帰結する *aporia* を切り抜けるためには、労働一般を商品に帰属させ「対象的・凝固」状態にあるままでそれを捕獲する以外に手はなく、捕獲に成功した暁には手の中にしたものは労働一般から「価値」概念に変貌していることだろう。労働一般を体化する商品観念は一つの *metaphor*, ブルジョアの「平等と正義」を現実に廃棄するためのいわば準備工作のようなものである。命題①を元に戻してみれば次のように表示できるであろう。

ブルジョア社会に実在する平等と正義は「ブルジョアの平等と正義」にすぎない、と宣告したところで、この批判的・分析的判断が事柄それ自体の「真」を表す命題に変容するわけではない。「人間労働は価値を形成するけれど価値ではない。…」も次のように変換される。

平等と正義の観念は「ブルジョアの平等と正義」の基体 *substrat* ではあるが「ブルジョアの平等と正義」ではないと。

商品を生産する労働は「ブルジョアの平等と正義」のメタファであって、この概念が単なる観念諸形態（デュステット）ではなく、物的〔対象的・感性的〕形態で実在しておれば、理論的批判を“現実の批判・否定”に繋げる地平も開けて来よう。しかしながら平等と正義の現実的形姿——「ブルジョアの平等と正義」は、その観念とは逆に「労働の価値」収奪、労働の「不平等と不正義」を示しているからとて、「平等と正義」を革命の理念に掲げるのはいわば“貨幣だけ廃止して商品を温存”しようという寸法と同じで、革命理念はおろか「ブルジョアの正義」の廃棄すら逃してしまうと弾劾する。（『哲学の貧困』「労働者と資本家との交換」を「分配の不正義」と見る常識に対して、ブルジョアの平等と正義のメタファである商品概念は「不正義」ではないが“否定さるべき”概念として構想され、その結果、“分配の不正義”が“赤面する”ほどの形而上学的奇怪な行動をとる概念、単なる交換される「社会的物」に過ぎない物件 *Sache* が丸ごと人格を支配するウルトラ“不正義”物語が仮想空間に出現するのだ。いわば「交換的正義」を正義のカテゴリーから外し、“正義面”した悪魔（メフィストフェレス）に譲渡するが如き様相である。ただしこの悪魔も人格を篡奪してその勝利に酔いしれる身分ではなく、（人が人格を回復するためならこんな入り組んだ芝居をする必要もない）自身も人間同様の“歴史的・自然的目的”によって派遣された“贖罪の子羊”，人が人に生まれながら自分で達成できない“人間解放”を成就するために歴史の神によって指名された身代わりの犠牲者，したがって廃棄対象＝悪魔と見るのは早合点，商品価値は人間目的を達成させるための暫定的実存，その実現と同時に存在理由を無くして消えねばならぬ悲劇の主人公なのだ。（Kazuo Isiguro の“Never let me alone”の主人公たち・Donner 人間に重なってしまう）

これだけの仕掛けを弄されると、正直者のプルドンならずとも（エンゲルスが自分は経済学に関しては終生第二バイオリン引きで経済学批判はマルクス一人の手になると強調し、こんな形而上学が必要なら“お手上げ”と仄めかしたのは正直かつ *risky* な話だ。後の *stalinist* や本家本元の革命理念そっちのけで大手を振ってまかり通る“*Versachlings-These*”と対比すれば）この畏から抜け出すのは容易ではない。自己の言説がブルジョワの権利もろとも、大革命が掲げた「市民と人間の権利」をも廃棄する市民社会のジェノサイドとなることを自覚しつつの荒行決意である。労働者の境遇改善を目指し、革命の聖人ルソーも19世紀の現実では「共和主義的反動」といって恥じないプルドン、その人が人間の知性は「真理」自体を知ることはできない〔これぞ「物自体」*concept* の体得だ〕とす

る合理神学・自然神学の系譜に立つて商業の自由は「自然的自由の体制」〔スミス〕であって手放せないと思ふるとき、両者の決裂は必至である。

本題に戻る。抽象して取り出せばすり抜けてしまうこの *aporia*、通常の分析手法では不可能なことはすでに見たとおり早くもロドス島の出現である。どのように飛ぶというのか？

出発点はいくまで命題①でありそれを反古にするわけにはいかない。それ *hypo-thesis* がなければ問題自身が雲散霧消してしまうからだ。とすれば、分析者の判断を示す命題①から、事象それ自体 *Sach seiner selbst* を透視する分析者の超能力への移行が頭をよぎるかもしれないが、分析者の分解力をいかに鋭くしても、それはあくまで観察する理性の「理論的」態度であり、よしんばベルグソンの直感並に商品のうちに「価値魂」に変貌した「対象化された労働」を射抜くと仮定しても現実の商品には何の変化も起きはしないのだ。このアポリアの超克が「精神と存在の同一性」を要請（かつ自ら「論証」）する「絶対的（統一の）体系」を前提する場合にのみクリアしうることも了解されるであろう。この体系を知悉しておればこそ、このように問題を提起し読者を誘導することもできたのであって、絶対もしくは「真」の認識の可能を目指すものにとっては打ち勝ち難い誘惑 *magic* であろう。バルザック〔『絶対の探求』〕ならぬ読者としてのわれわれも、そうした「絶対的方法」が一世を風靡したこと、それが並々ならぬ超絶技巧を要した事も知っている。一瞬の輝きを放った後、突如人々の記憶から消え去ったことも合わせて。

（何故か？ この過信、解いたと思った謎は解かれる謎に変更されていたこと、概念として捕捉された世界も把握する自己・主観的概念と同類の客観的概念であり、物自体は（暗黒星雲の如く）概念からすり抜けていたのをうっかりしてたという訳だ。カント的に表現すれば、直感の対象から受容した表象を *apriori* な概念を用いて「可能的経験」をその対象と同時に構成（コペルニクスの転回）しても、直感の対象の存在理由は人の理性には届かぬ *X* でしかない。全てを瞬時——ビッグバン最初の一秒と異なり比喩——に見通す「知的直感者」ならいざ知らず、とカントが保留をつけたところにヘーゲルは敢然と挑戦の糸口を見出したのだが、それは概念として把握された世界であって世界それ自体には届いてなかったのだ。⁽²⁾ 世界自体はラッセル流に言えば *one rank* 上のメタ世界、ヘーゲルの「絶対精神」といえども世界（自然と人間）に限定された、きわめて人間の顔をした神だったのだ。

哲学者は多かれ少なかれ狂気 *Tollheit* の持ち主、とはヘーゲルの言葉だが、再度この挑戦が成されるとすれば（「絶対」とは有限な理性からすれば「無」規定——これぞ「物自体」の定義だ——だから、それを「転倒」することは不可能なはずなのに）、世界の謎ではなく人間の謎解き・ブルジョア社会のそれへと小型化されたとはいえ、この挑戦者の好んだアフォリズムを借用すれば、二度目は悲劇ではなく喜劇となるであろうことは必至である。「神人」の「概念的把握」を *logical fiction* と見破った点では同じだが、それを「人間の謎解き」に借用しようと踏んだマルクスとその非を咎め、パンドラの箱を理性でこじ開けなかったキュルケゴールとの差だ。）

INTERMEZZO

経済学批判体系の狙う「対象性」祈願は、神の「存在論的証明」の向こうを張った「絶対の探求」であり、「唯物論的転倒」と称される所以だ。自己原因的な存在者という思考物が人々の意識と行動を支配し続け、その死が宣告されたのはつい昨日のことであってみれば、啓蒙主義の確信（神の死）に反逆し、その再興に与しかねない抽象的概念の実在性要求は神人ヘーゲルには

ふさわしくとも、その唯物論的転倒を掲げて登場したマルクスが対抗手段として用意したもの——それが抽象的観念・超感性的対象の感性的対象性、「形相」へのアクロバットの「生成」の要請であった。

抽象的観念の実在性希求と観念一般の自立性の棄却志向、一見、この絶対的に矛盾する命題の一項をそれぞれ独断的に主張する主観的観念論と唯物論の対立を融合したのがヘーゲルの「絶対的観念論」（ここに「観念」論と称されるのは、和解提案の initiative は「意識」の側からしか出てこないという痕跡に過ぎず、「絶対的」の用法にふさわしくないのはヘーゲルの危惧するところ、案の定、世上とりわけ唯物論はマルクスの超 Idealismus は見過ごす一方で、唯物論満載のヘーゲルを主観的観念論に分類し、敵対教義を模造することで己の anti-thesis としての永遠の安泰を図る始末）、マルクスの場合、いわば実在性に仕立て上げた観念諸形態を「解釈」の上において廃棄するのではなく実際に廃棄するという二段構え、いいかえれば、前半の抽象的観念を実在に仕立てる段では「絶対的方法」を採用しながら、その実在性に転化したメタ観念を実際に否定する段では、その絶対的方法もろとも観念一般の自立性を顕示する自生的秩序、その象徴である貨幣を廃棄するというねじれた構造になっているため極めてややこしい。絶対的観念論を媒介に生成した唯物論的転倒、もはやそれは主観的観念論に対立する「唯物論」ではない。

この絶対的矛盾の解決が「絶対精神」の体系上でのみ可能になること、つまり世界は「絶対精神」の moment 分身としてのみ存在可能であるが、抽象的観念の実在性請求の段では「ヘーゲル主義」に与しながらも、実在性を要求したのも方便、ヘーゲル体系は必要悪と蔑され弁証の結果としては「感性的・对象的形態にある観念諸形態一般の自立性の実践的廃棄」のテーゼだけ残されることになる。これは「転倒」Verkehrung でも何でもなく、絶対・無・破壊すなわちメタ“革命”宣言の構図だ。

さらに抽象的観念・超感性的対象の对象的・「経験的」実在性への希求の背景には、神を退治した後遺症〔精神的外傷のトラウマ〕が色濃く影を落としている。王の首を刎ね、教改領を没収したのも夢ではなかったはず、無神論者・自然主義者（ドルバック）が神は死んだと確信してるのも錯誤ではない。だのに神は死んでいなかったのだ。狂信的理性崇拜者ロベスピエールも理神論ならぬ「人間教」〔偶像崇拜〕にまで後退・妥協させられたことを思い出してもみよ。民衆は宗教なしに一瞬も生きれないことに変わりはなく、知識人の無神論 a-theiste とはいっても Anti-Catholic の無神論であって心中は敬虔な神への祈りで満ちているのだ。（合理神学 de-theiste —— ヴォルテール、ルソー、カント、スミス、竹下節子『無神論』中央公論社、2010参照）単に心像 Bild として信仰篤き人に啓示・奇跡として訪れるのと異なり、“歴史の寵”から発出する Idea・観念諸形態の自立化を地でいく Idealismus、これこそ神の震源地、ここを掃討しない限り神の誕生は後を立たないし啓蒙の過信を咎めることもできないだろう。ここを一斉手入れして一网打尽にすること、これが「最後の決戦」だ。打倒すべき悪魔神とは Idea/Idealismus、その観念が自立化・制度化している市民社会・商業社会こそこの決戦にふさわしい topos、歴史の神はこの日を待ち望んでいたというわけだ。

してみると商品価値論とは否定さるべきブルジョア的平等と正義のメタファであるだけではなく、未だ死に絶えていない観念諸形態の神と人間との位格を賭けた「最後の決戦」に誘う記号 symbol でもある。この戦いの主役は観念の自立性廃棄を要請する絶対的唯物論——「自然的・

歴史的必然性」をモットーにする——が握らなければならない。観念の自立性が闊歩する限り、自然主義者のように自分の心中から姿を消したことをもって神の非在と錯覚し、歴史の窠から日々発生する観念諸形態の自立化こそ神の発生元であるのに、唯物論のみが見抜く神を見逃しその温存に手を貸すからだ。（カントが嫌悪されるのも「物自体」だけのせいではないのだ。ただしこのbattleはいわば超仮想空間、「絶対精神」の臨在する舞台上の出来事、唯物論が超観念論に鞍替えしている入り組んだメタ物語、これに比すれば、Creatorの「最初の一撃」、理性神あるいはヘーゲルの神人などなんと素朴で正直者であることか。）

かくして啓蒙主義の自己批判は無神論の自己批判から始まり、打倒する相手を“観念諸形態の自立化した自生的秩序”に特定してその退治に取り掛かることになる。これが何故観念論と唯物論が錯綜してマルクス主義者を悩ますのか、というより何故マルクスがヘーゲルの方法「転倒」してまで必要としたか、その震源を語ることになろう。かつて抽象的観念の実在性は啓示として信仰篤き者に突如訪れる理性を超えた奇跡であり、理性の証することではなかった（パスカル、森有正）。それに抗して自己を異端・神学の批判に晒す覚悟で、カントの「存在論的証明」批判を脇目にしながらそれを独断論から学の体系に仕上げて復活させたのがヘーゲルだった。神とカントを向こうに回した荒行、神人的装いをした反-啓蒙の精神も、実は“余りにも人間的な”神であり、紛いなくカントの嫡子・後継者だったのだ。（バウアー『最後のラッパ』、異端も異端、無神論にして非クリスチャン）

この第一の転倒、抽象的存在の啓示からの解放は絶対精神の存在証明によって可能になり、精神は現実に自由な存在であり単に Sollen ではないとしてカントに報いたのだが、第二の転倒・唯物論的転倒とはこの「自由」が精神の自由・純粋理性の自由で有る限り、それは意識のうちに於ける出来事・解釈物語であり、それによって生身の人間 person の「自由」が確立されたわけではなく、それはまた episteme 哲学でなしうるのではなく実践的変革を要するということになると、これはもはや「転倒」次元の話でけりがつく問題ではない。国家を「客観的精神」と規定して満足する絶対精神などこれに比すればささやかなもので、唯物主義という名称とは裏腹にこの「転倒」は世界（人と自然）を焼き尽くさずしては「自由の王国」を建設できない人間中心主義の逆説を晒すことになろう。これも神亡き後の last man の nihilistic な生き様であろうが、壊滅後の世界が無垢な・金銭欲から開放された「自由人の連合体」と描かれて溜飲を下ろす者がいるとすれば、Abend Land に君臨してきた“神々の深き欲望”の支配に終止符を撃たんとする超人の業の深き resentment を見過ごすことになろう。それは啓示の奇跡が訪れぬ layman を天上の神に代わって「否定」の事業に誘うルアーなのだ。ヘーゲルの止場 Aufheben は超越論的世界における解釈物語であり、一切の現実性を保存するのだから、テーゼにいう「解釈」の典型だ。マルクスの否定は現実世界における出来事だから、それは「解釈」Aufheben ではなく破壊となる。ただし破壊宣告が理論的「解釈」に堕さないためには事象自体の自己崩壊が「論証」されねばならず、そのために考案された Bild が「資本」なのだ。ここでは「特殊歴史的形態」と称される内容・実在性は否定されるのであって保存 aufheben されるわけではない。ブルジョア社会という栄光と悲惨を集約した「文明」を否定・破壊する時間軸は、それがホブスのあるいはルソーの「自然状態」であるかにかかわりなく、貨幣と資本、財産制度を廃した状況にあるのだから、どうしてそれが前向き perspective であって後向き retrospectiv でないと断言できるの

か？これは東洋の言葉で表現すれば、天誅に名を借りた歴史への「造反」だ。弁証法的矛盾の解決、「自然的・歴史的必然性」の時間の矢は前向きとは決っていないのだ。

補論

命題②の方法に「科学的」の形容が割り振られると、命題①のそれが、非科学的＝ブルジョア・イデオロギーに分類され、通常分析命題が押しなべて非科学的・ブルジョア・イデオロギーに還元されてしまう。命題②が絶対的「真」だという「論証」を担保にして。通常用語法に置きなおせば、命題①は「実証科学」・分析的方法であり、命題②は「形而上学的」方法であるから、順序は別にして、思考方法のランクが一段づつずれているのだ。唯物論は以下に見るように自分は「科学」で形而上学は「神学」と自己都合で解釈するため（どちらも独断主義にすぎないのに）、形而上学は似非科学と同義となつてこうしたランク付けが生じるのだが、マルクスの呼称する「科学」が形而上学だとわかれば dogmatist も改宗に吝かではなからう。

〈唯物論のテーゼ——権利問題の無自覚と事実問題への解消〉

商品を相手に労働の「対象性」を要請する背景には、独断的な存在論、主観的観念論の向こうを張る唯物論が控えている。imaginary な観念（カントの言う超越論的对象：神、自由、魂の不死等）と「可能的経験」世界に於ける「経験的」観念もしくは概念の有り様を区別しないのだ。後者は対象の直感的表象に基づき、人の知性に apriori な判断図式を用いて対象の概念を構成、即ち「可能的経験」とその対象の同時成立を思考して“認識とその対象の一致”、つまり、通常真理観——自然の法則性検出も可能にしているというのに。

あらゆる観念の自立性を否定し、観念一般の実在性の根拠を知性の認識のあり方に求めるのではなく、観念・意識諸形態は「認識から独立した存在・物質の脳髓への反映」と見なして、超認識的な存在・物質の apriori な実在性を独断的に要求、それによって観念諸形態一般の自立性を否定、全ての存在者の有ることの「真理」を認識と無関係に物質的、感性的性格に求めるのだ。誰しも『経済学批判』の序言で宣告された定式に思いをいたすであろう。

この窮屈な硬直した思考は、認識の可能が認識対象の同時生成であるとするカントのコペルニクスの展開の成果に依拠すれば、対象の概念とその実在性は一致しており、何もマルクスのように観念や概念の実在性を確認する手立てとして、新たに「対象性」、感性的性格を要求する「形而上学的」操作の必要は無かつたはずだ。「物自体」=不可知論に災いされずに受容されていれば（マッハは物自体に見向きもしないというのに）、あるいは「物質」という観念の虚妄性を指摘しつつ人間の事象と自然的事象に認識論上は区別を設けず、一括して「出来事」event or occurrence に集約するラッセル・ホワイトヘッド〔さらには同じ系に連なるベルグソンやパース〕等の考えに time-slip することができていれば…。(カントのアプリオリな時空論（とカテゴリー）を評価するハイデガーとは逆に、ヒュームの観念連合説を乗り越えると同時に、physical fact と mental fact (percept) の Similarity を追及して“カントのコペルニクスの転回”にも批判的なラッセルの検討が残されている。筆者の素養はプラグマチストのカント批判を素描した程度にとどまる。Could Kant be classified in meta-narrative? —referred to Richard Rorty's philosophical view—大阪経済法科大学『経済学論集』2003. 9)

ここでテーゼ「存在（自然）は意識から独立し、存在が意識を規定する」を取り上げてみる。このテーゼ（思想 Denken）が効験新たに世界の起爆剤になるとすれば、ラディカルな理論なしに

変革無しとの“激”どおり、思想こそ存在を規定し命題の逆が真となる paradox が生じはしないか？ 人類が誕生するはるか以前に太陽系・銀河系が存在したことなど誰も否定しないし否定する必要もないから、このテーゼは自然は誰のものかと問い、神のものではなく自然のものだと反論してるわけで、事実問題で争う振りして帰属を争っているのだ。（アラーの神の命令に従うのと「自然必然性」に従うのとどちらが神・自然の御心に従ってるかの battle だから、自然が出汁に使われ毀損されてるのは明らかで、イスラムの世界でこの呪文を唱えたらジハードの餌食になること間違いなしだ。）ただし、この反論は「自然という概念」や法則を発見した人間が主張し裸の自然が弁証してるのではないから、観念や法則から独立した“絶対的真”ではなく“可能的経験”としての真だと唯物論の独断主義をたしなめる事が必要だ。一言で言えば、命題とは観念を統辞法で配列した思考物、テーゼを提起する自己意識があって初めてその内容の判断（唯物論の主張）に移行でき、内容はこの前提条件を容認してもなんら損傷を被るわけでもないのに、観念なしの裸の自然、存在を独善的に要求するところにこの命題が二律背反に陥り、自分で自分を否定せざるを得なくなるのだ。

自然という概念こそ「真実」存在で裸の自然なるものは存在しないとする主観的観念論の anti-These が唯物論の位格・身分、自然の領有権を神に帰属させることへの抗議だが、異議申し立てしてするのは自然ではなく人間であり、自然をネタにした神と人の権利闘争であって、そうなるのも「自然という概念」は「自然とは何か」と問う存在者が存在して始めて出現しえた観念、その存在は自己意識を持って「人間とは何か」と同時に問うていたのであり、その自己を基準に意識、目的因もなく“ただ有る”だけのそれに見立てて「自然」という concept を割り振ったのは人間だった、という至って自分本位の理由に拠る⁽²⁾。自然の概念とは「自然法則」の謂い、自然は数学言語で書かれているというも、それは自然の数学的原理としてではなく『自然哲学〔この哲学が“観念”だ〕の数学的原理』としてであって、その観念・概念なしに裸の自然・裸の存在から法則性つまり自然の存在は検出されるわけではない。「事実問題」に見せかけた独断の主張に比すれば、改めて仮想空間における出来事とはいえ、存在と意識の和解を企図した神人ヘーゲルの試みが、いかに真摯な“人間的な、余りにも人間的な”それに見えてくることか。

唯物論とは神を警戒する精神的の外傷疾患から来る分裂症だ。唯物論は観念を忌避するあまり剥き出しの事実・存在の「有」を主張する。観念論・神学を警戒するあまり、神学に難攻不落の城砦を築いて自然や人間を保護すること、それ「科学的」と弁証するのだ。しかしそれが自己の利益に叶うからであって、違いは神学の利益とはベクトルが逆向きで有るに過ぎない。両者ともさらさら事実判断の真を問うているのではなく、天敵の打倒こそ唯一の生きがいとばかり自己の利益確保に専念してるだけのこと、唯物論の臆病さが観念の不可欠性を認めれば神の復活を阻止できないとばかり、スターリンの亡霊さながらにおびえる被害者妄想を生み出すのだ。神の呪縛を恐れる余り存在者を観念諸形態と物的・実体的形態に区分し、あたかも後者は観念やそれを用いる判断無くとも存在するかのごとき独断的言説——唯物論を構築したのだ。自己のテーゼがテーゼ自体を裏切っていることには頬被りして。神への怨念ルサンチマンに取り付かれている無神論はもはや anti-these 留まっていることはできない。人が神の子になるのではなく煙立つ竈から神が発生するなら自然的欲求自身が捜査対象にならねばならぬ。これぞ神退治物語に経済学が選ばれ、経済学批判が開始される理由だ。

（二）形態論的「分析」——「実体形相」論

交易当事者を捨象し、交換による欲求充足という契機を捨象して交換される物財＝商品という規定だけを残存すれば、物財に配属された労働一般にしかその交換を説明する原理が残されていないのは Tautologie だ。とはいえ一体どのようにして説明するというのか？

それは分析者の判断を示す命題①の賓辞 copula を「…が有る」とする存在、事象それ自体の可能 (an sich) に読み替えることによってであり、それは賓辞 copula から「实在」を引き出すことはできないとしたカント〔後のフッサールなど〕の cogito 批判を再転倒して、「有る」sein とは有ることの判断、それ自身による判断 Ur-teilen でなければならない、として判断・認識のうちに存在を取り込む絶対的方法（存在＝概念）で cogito を救済・復活させたヘーゲルの道をなぞることを意味し、かつてブルードン批判の際槍玉に挙げていた方法だ。有るだけでは物レベルの有、真の存在は自ら有ることを知るという思想—これはカントの存在論的証明批判の後ではそれは「存在の論理学」による論証を必要とする超越論的命題である。労働の宿主・商品の体を借りた手法がマルクスに独自の唯物論的「存在証明」というなら、世界を包摂したヘーゲルのそれは特大の”唯物論的証明“ということになろう。

全ては分析命題 hypo-thesis—so and so 斯く考え言明することは可能である、という意味での可能性・観念性を事象自体のそれを表示する thesis—an sich Sein として読み替えるという操作のうちにあり、ここから自然言語では理解できない商品語・超越論的メタ言語界に移ることになる。経験的实在性の見地からすると、「見えない・知れない」事象であるから「無」規定であり、非实在的なものでしかありえないが、絶対精神が自然のうちに自己を「透視」した如くそれを透視しうる Über-Mensch から見れば、まだ可能的で観念的身分にすぎないものが实在存在資格をもつとみなされる。これは超越論的透視力に対応して超越論的対象の側にも変化が起こり、対象の側自体も「対象自身の意識」〔客観的精神〕、主体・自己 Das Selbst になることなくしては成立しえない。すなわち意識は存在についての意識ではなく、意識の自己と存在の自己はもはや区別されず統一されて、意識は「存在自体の意識・判断 Ur-teilen 根源的分割となる。

以上の説明は『精神現象学』の方法をなぞったものだが、それに即して形態論的「分析」と自称される超越論的分析（中世スコラの「実体形相」・自己原因論）を解釈してみると、「対象化された労働」は超感性的で“見えない”ものではあるが、可能的・観念的には「有る」存在、つまり「意識」一般に相当する価値概念 an sich Sein となり、二つの特殊な「価値」形態 für sich Sein がその存在の意識の自己、すなわち「自己意識」に対応し、生成した商品〔観念的貨幣〕と貨幣〔価値の化身〕が価値形態の an und für sich, つまり“現実”となった価値概念、これが価値＝価値概念という“存在と概念の同一性”が証明された system の誕生物語、syn-thesis となる。

価値論の地平とは「世界〔商品〕の誕生以前における神々の意識〔価値の意識〕の叙述」を欠落・省略した見かけの下、（表向き「絶対精神」の体系を採用できないため）精神哲学の「欲求の体系」を論じるところで同時に存在の『論理学』を展開するようなものだ。（それが「絶対精神」の

体系であるにもかかわらずドグマに抵触するため、認識論として読まれるべき個別科学にして『論理学』という“解釈”が唯物論を自衛する。一言付記すれば、「認識論的読解」を精査して自然科学では通用しない“弁証法、矛盾による発展論”に異議申し立てしたのはわが師見田石介先生の功績である。ただしヘーゲルの思弁を紐解きながら、自己の超越論的「分析」を事実判断・「科学」と強弁するマルクスの方法を肯守した結果、絶対精神の別名に過ぎない「歴史的必然性」をはじめ、独断的唯物論を dis-contraria するには至らなかった。）なお商品は「社会的なもの」とはいえ物であり、ヘーゲルの体系では市民社会の欲求主体・自然人を意味する person に相当し、まだ「普遍・類」を表現する「主観的概念」——Menschheit, Personlichkeit には到達していないから、「価値の額に刻まれて」いる商品語の解説は価値にはできない。

形態論的「分析」の成果を以下に要約する。

商品は「観念的」貨幣として実在性を獲得し、貨幣は「価値の目に見える化身」「人間労働一般の結晶」として「価値形態」=貨幣形態であることが明らかとなり金の謎も解かれたと宣言される。今や商品と貨幣は名実共に商品世界における「市民」と「王」として君臨することになり人は完全に舞台から姿を消す。価値概念は流通において形態変換 Metamorphose しながら、自分で自己を維持する「実体」であることを証すると同時に自ら流通過程を差配する自立した主体 Dsa Selbst であることをも確証する。

それは価値を自己の本性とする商品の人間からの自立いいかえれば位格の逆転、人権が物権の法原ではなくあたかも物権が一人歩きするような光景だ。今や商品は人の手を借りずに自分の「足」で市場に向かい、他の商品と「商品語」を交わしながら交渉を成立させることなど朝飯前のこととなる。ヘーゲル「論理学」の für uns が「神人」であることに boing を鳴らす唯物論者も、この奇怪 okkulte なアイデアが「神人」の小型版であることを承認せずにはいられまい。

要約：価値〔存在=概念〕とは、労働を支出した当の主体・人間が労働生産物に対する所有権を主張〔自然法・神法〕する向こうを張って、正札を付けた位格の所有権は労働が体化されている商品体に帰属するとする言明、それが価値概念・価値「存在」である。かくして「価値」論の problematique が事実判断を超える「権利問題」、形而上学に所属することが判明する。商品体の所有権が労働に帰属するのではなく、労働が対象化されて「有る」商品に帰属するとする主張するとき、この意思し判断する主体に「価値」概念が張り付くとしても形容できようか。

位格領有権を労働から篡奪することこれが価値概念の使命・存在理由となるのだから、いわば神の子が精霊の帰属権を巡って本家の神から略奪するが如き反逆児ぶり、舞台は最初から殺気に満ちているのだ。これは価値論の文脈で意図的に伏せられ explicit に語られることがなく、ユートピア社会主義の革命理念批判のコンテクスト（「労働の正義」、「全労働収益権」批判として、分配論の次元で）で関説されることが価値論が権利問題・形而上の問題で有ることを覆い隠す仕組みとなっている。その意味では、著者が述べていないことを別出するのが批評の役割となろう（ハイディガー）。この価値概念がいかに資本概念に組み入れられることに抵抗するかそれが次章のテーマとなる。

次節で見る物象化論はこの事態をシナリオライターの筋書き通り“人は persona の位格を商品に剥奪された傀儡”と読み込むが、スミスの「交換性向」ならともかく、最初から人が不在の舞台上で演じられた出来事 Spiel によって人格が毀損されるとしたら、ハムレットの悩みを通り越

して“冤罪”として告発せねばならないであろう。脚本家はこれを見越して先手を打っている。人は知らないうちにそういう転倒した秩序を形成しているのであり、したがって商品を主役に祭りあげ自らを貶めた責任は挙げてあなた方 trader にあるのだと説く。これは形而上学の悪用、“歴史の狡知 List”の残忍な利用、カント流に言えばその意図においてすでに schuldig, 人倫の道を外れている。革命家に人倫を説くのは釈迦に説法とはいえ、この物語が fantasy であることを忘れるときいかなる悲喜劇を招来することになるか、それは次節で語ろう。

最後に一言：この「分析」成果が真なる命題として検証されたことがあるか？「人間労働一般の結晶」という概念把握を欠落すれば貨幣の絶対的購買力は説明できないこと、それが「絶対的眞なる言説」であることを検証・実証したものが（マルクス主義者、物象化論者のうちに）いるであろうか？これは本来なら命題提出者の責務であるが、これは幸い懸賞論文のテーマに採択されたことがないのだ。超越論的命題とは現実に引き戻せば一つの仮説 hypo-thesis でしかないが、事実による検証を超越するのがその本性、事実によって検証されるような問題は実証的言説、それはマルクスの用語法では非科学的言説、科学的言説は事実判断を超えるメタ言説でなければならぬのだ。

（三） 価値論の弁証・弁護としての物象化論

メタ物語は事実問題を争っているのではなく、権利問題、つまり世界の存在者間の位格を問う物語である。マルクスの権利問題・位格転倒問題を「事実問題」と見なすことから、いわゆる人気の「物象化」問題が発生する⁽³⁾。

物象化論とは商品流通が交換当事者の意思と行動を表示する人間関係である、という平明な事実にも異議を唱え、交換は事象（商品価値・価値物 Wert-Ding）が主宰する過程であり、「社会的物」が人格を支配し人はその傀儡ととする言説、またそれが指示する「転倒構造」を指して用いられる術語 jargon である。“見えない価値”の読解に加えて、この人格の主体性喪失に対応して、Sollen に解消されるしかない無力な Humanism の地平をはるかに越えるトポス、すなわち現存システムを丸ごと“否定する”可能性を覗かせていること、それがこの仮想空間における物語・物象化論人気の秘密だろう。

翻ってそこに見過ごされているのは単純なこと、この転倒の仕掛けによって自尊心を傷つけられたのは人の側ではなく物の方だということだ。仕掛けた側は意図あつてのこと回復を確信して仕掛けているわけだから、これはヘーゲル疎外論そっくりのゲーム Spiel であるはずだ。かく申せばさっそく誰も人間が物化 Verdinglichung したなどと奇想天外なことを言っているわけではない、物化と物象化の差異を持ち出して反論されるかもしれない。

価値は利己的モナド、その目には光彩陸離たる商品の形姿もその使用がもたらす満足や快樂も一切が存在しないも同然で、それが遵守すべきルールは「等価交換」だけである。これが価値の世界だとすれば、物は「社会的物」になったばかりに本来の姿を抜き取られたと言っても虚言を弄してることにはならないであろう。もちろん仮想空間における出来事 facts であることを忘れない限りでだが。もの言わぬ「物」に社会的物を理由に「商品語」をしゃべらせたのは誰か？

物が物の自然言語でしゃべるなら次のように言うはずだ。

“人の勝手な都合で私が自然から授かった素質を冒瀆しないで欲しい。なるほど私は自然から授かった性質以外に、あなた方人間の貴重な toil & trouble の産物であることを無視するつもりはありませんしそのために正札をかけているといわれれば甘受もしましょう。だからといって労働が私の体に built in されていることを口実に、その対象化された労働を私が「我が物」にして、あなた方の所有権・財産権を侵害してるなどとはいわないで欲しい。それはあなた方の自由意志でなされたことで私どもがお願いしたことでもなくらい承知のはず、冗談も程ほどにと申し上げたい。あなた方の労働で私は現在のような形姿をしているのですから、私どもは自然を父と敬うと同様あなた方を母と慕ってさえいます。ただし、労働も顧客の目にかなう商品の生産も挙げて収益目当てというあなた方の事情からきていることを思えば、それほど感謝しなくてよいのかもしれない。

ともかく正札はあなた方が私どもに掛けたこと、あなた方自身も本気でそれによって自分たちの本性が侵害され乗っ取られたなどというのはとても正気の沙汰とは思えません。自己意識的存在ゆえ私どもより一ランク上の階層にあると常々尊敬もし、これまでも数々の抗争や内乱の危機を乗り越えられてきたあなた方が内部の調停を見限って私どもに向かって来るにはよほどの危機状況に置かれていると推察致しますものの、メシア祈願と方向違いの進軍にあなた方の間に絶望と精神錯乱、狂気と陰謀が蔓延してると感じないわけにはいきません。お気をつけて。

物象化論の存在理由は、「社会的物」からの疑問・質問状に謙虚に答えることであろう。正札と素材（物体）が抗争するどころか共存してこそ「社会的物」なのだから。

追伸

人格奪還闘争に乗り出す振りをして私を葬り去り、社会的物が二度と人間の首座を奪う不屈きな気を起こさないよう正札をつけない物に戻すということなら、全てはあなた方の一人芝居ではありませんか。自給自足や物々交換の経済に戻るのあなた方の勝手ですが、私は正札を外されても死ぬわけではありません。あなたが *fantasma* 幻想を抱きその幻視が信仰者の啓示 *apocalypse* の如く「現在」するようになったのも、もとはといえばあなた方の *preson* に相当する私の *Geist* にこだわるあまり、私の概念から身体が消えうせ、“見えない” 霊 *Geist* のみがあたかも幻聴のようにあなたの中で一人歩きするようになった所為ではありませんか。冬の日の幻想や孤独な散歩者の夢に浸る機会のない私はこれまで通り人々に享受される身体を持った存在者であり続けるでしょう。かしこ

物象化論を仕掛けそこに誘導したのもマルクスその人であってみれば事態はマルクスの中にある。何故マルクスはそうに仕掛けたのか？メタ物語は当事者や通常の知性には“見えない、知られえない”事象の叙述であってみれば、かの「分析」と自賛する展開はそのままでは読者に理解されないからである。

それゆえ、物象化論とはメタ言語による「分析」を自然言語に翻訳するという形式的作業にとまらず、超越論的論証を事実判断に転換すること、内容的には「先の分析」の繰り返しであるが、表向きは上演を終えたシナリオ・ライターの自作解説、読者サービスの体を装いながら読者にその受容を強要する舞台ということだ。場違いの重金主義 *fetischismus* を持ち出し、そこに分類されることを忌避したがる通常の知性の心理性向を見通したうえで、二者択一的に問題を構え、

それによって読者をこの倒錯したメタ物語の袋小路に追い込める仕掛けなのだ。物象化論とは一言で言えば、物体が自己の慣性質量（*inertia*）に従って中心に落下〔運動〕するように、「社会的な物」たる商品も自己原因（*inertia sui*）によって運動する、という“機械仕掛けの神” *machinae* 物語を現実の物語、「真」であると弁証する“物語の物語”である。

しかしこの変換作業は根本的背理に直面する。というのももし通常の知性に理解できない物語を人の自然言語表示に翻訳できるのなら、そもそも当のマルクスの出番はなかったという単純な理由からであり、学問に王道なしと読者に自らの苦闘を語る必要もなかったからである。もし自然言語で解題されうるとすれば、先のメタ物語の独占的希少価値は一気に消失するのだから、端から読者と会話する（作品は“読者との共同作業”サルトル『文学とは何か』、ユーコの「モデル読者」—『テキストの概念』）気などなかったことをここに来て暴露するようなものだ。ここでの *aporia* はいわば“絶対的矛盾”，ローレンツ変換のようにはいかないのだ。読者に通じなくして作品の意図は達成されないが、かといって理解されるような言説は押しなべて「分析命題」，事象の真・本性から逸れた「非科学的・ブルジョア・イデオロギー」に変容するのだから飛ぶにも飛べないのだ。またもやロドス、折り合いをつけることは不可能だ。で、どうしたのか？ もちろん読者に媚を売るどころかメタ物語の再説を押し通したのであり、しかも読者に理解可能と思われる「歴史物語」に変形を施して。これが物象化論と称されているもの、それが「先の分析」を弁護・弁証する擬似歴史物語となるのは避け得ないであろう。

超越論的物語を歴史物語で自然言語に翻訳する *paradox* を解決する唯一の方法は、歴史物語を逆にメタ歴史物語に書き換え、しかもそれが通常の歴史物語であると居直るばかりか、それによって超越論的物語が（あたかも）検証・確証されたとして（この場合には、通常の知性にも理解できる自然言語で書かれているだろうから）読者を安心させること、言い換えれば結局は「先の分析」が現実にも通用する事実判断・真 *real* であることを読者に強要する舞台でしかないのだ。例を一つ引く。

「商品生産というこの特殊歴史的形態だけに当てはまること、即ち独立した私的諸労働の独特な社会的性格は、人間の労働としてのそれらの同等性にあり、かつ、この社会的性格が労働生産物の価値性格という形態をとるのだということが、商品生産の諸関係にとらわれている人々にとっては、あの発見の前にも後にも究極的なものとして現れるのであり、ちょうど空気がその諸元素に科学的に分解されても、空気形態は一つの物理的物体形態として存続するのと同じである」

労働性生産物が商品に転化する歴史的事情は商品およびその観念を生み出しはするが特殊な商品「観念」，通常の知性には見えず、見えない本質をその「価値」と規定されてその実在性を示す「商品」概念を生み出したりはしない。ここに通常の商品観念に超越論的概念を重ねあわす欺瞞がある。（いわゆる“歴史理論”あるいは“経済学による唯物史観の検証”なるテーマの出現根拠）

この超越論的価値規定の発生史を描こうとすれば、当然のことながら「先の分析の」成果に立脚して、「先の分析が明らかにしたように」という前書きが全てであり、後で人間が登場しても「知らずに行く」（*Sie wissen das nicht, aber sie tun es.*）⁽⁴⁾⁽⁵⁾ のであり、「考える前に行動する」（*Im Anfang war die Tat. Sie haben daher schon gehandelt, bevor sie gedacht haben.*）しかないのだから、これを「正史」ならずとも通常の歴史（列伝物語）とすら見なす人はいないであろう。

事象の関係（交換）が人間関係であるというのは、“言わずもがな”の恒等式、交換当事者に

よる商品と貨幣の交換であるのに、それは“見えない”「価値形態」の形態変換、自立した事象が人間に代わって交換を主宰していることを“見ない”皮相な見方と非難する物象化論こそ呪物崇拜 Fetischismus なのに、常識の方が呪物崇拜にとらわれていると、場違いにも bullionism を持ち出して叱責する。というのも通常の知性に見えないことを“約束”しておきながら、それを“洞察しない”とって叱責する訳にもいかないからだ。

しかしこれは論理のすり替え、約束違反だ。ここでの論点は現実の交換を管理統制しているのが人間か、それとも人間関係を自己のうちに取り込んだ商品であるのかその位格争いであって、貨幣の購買力の原因が争われているのではなくそれを自然的属性と見る“俗説”も、交換を主宰しているのが人かモノかという二者択一においては当然のことながら人に軍杯を挙げているのだから。社会的な物の自立と人の位格剥奪、これは金の絶対的購買力を人間労働の結晶に還元することからは引き出すことのできない命題、Fetischismus を持ち出しても何の援軍にもならないのだ。呪物崇拜があろうとなかろうと物象化論の住処は仮想空間、超越論的命題は事実判断によっては担保されえないのであり、担保されると仮定すれば、その途端に物象化論が事実には制約される命題へと変化してその超能力を一瞬のうちに消失し、問題そのもの problematique が立ち消えるのだ。何度も繰り返されるこのアナクロニズム、それは浦島物語同様超越論的概念の宿命というものだ。物象化論こそ okkulte Fetischismus の本家、その神秘主義に比すれば bullionism の自然崇拜などものの比ではない。

ここで話は一気に俗になる。

不可能を可能にする残された道は唯一つ、超越論的真を事実判断の真つまり事実 facts に架橋する道はないとすればそれは読者が著者の言明に賛同すること、通常の知性をもってしては見る、知ること、したがって理解することもできない「論証」を事実判断の真つまり事実として受容する心性へ転換することでしかない。これは信ずることであってもはや理性的判断ではない。

歴史物語に関してもう一つ題材が残されている。それは「価値の額に刻まれ」ていながら、通常の知性には見えないことの意味解読についてである。「絶対精神」の agent（価値はいわば person、自己意識を反照する自己を欠いているから、価値の傀儡となっている人同様、商品語ではこの“存在の意味”は解読できないのだ）が読解してみせ、価値が住む世界は前史——人の理性が意識的に構築したのではない秩序、自生的秩序、そこでは社会関係が価値として自立し、人間を統制・支配している、それは本史——生産が「社会化された自由な人間の意識的計画的な管理」の下に置かれた未来社会——に移行する過渡的、特殊的歴史形態という託宣だ。

物象化の「事実」は貨幣価格に替わって剥き出しの「価値形態」が現象的事象として現れでもしない限り通常の知性に見えることはないし、仮に見えるとすれば今度は貨幣の方が「価値の化身」・「人間労働の結晶」である理由がなくなって、物象化論の前提である「価値物語」自体が雲散霧消する羽目になり、どう転んでも「物象化」なる事態は常人の目に見えるものとはならないから、この読解のことで通常の知性が非難されることはなかったのだ。先にはこの事情に鑑み、通常人の物象化理解が困難なことを情状酌量しつつ、その合間を縫って物象化が現実の現象であるかの如くに誘導されたが、未来社会からのメッセージに対する無知・無理解については容赦ない非難が浴びせられる。異星から来た天才*すら例外ではなく、商品生産の特殊歴史的性格を見逃す非科学的・俗流、…と。確かにこれを“分析と展開の不徹底”のせいにしてその咎を糾弾す

る恣意性こそ、仮想空間上の出来事を現実のそれに置きかえ、返す刀で事実分析をブルジョア・イデオロギーと非難し、自説の超越論的性格を“科学”性の証とする見地から引き出されたものであり、至上の実践目的への狂信が全てを正当化するのだ。

要約：「社会関係が事象間の関係として現れる」と表示される命題が物象化論のテーゼ、いわば定番化した神話でもある。“見えない現象”だったはずなのに「論証」の成果の効験で事実に関する言明，“見える現象”と見なす心的態度が醸成され物象化論が誕生するのだ。すなわち物象化現象は現実の事実 facts とばかり、価格領有権が労働から価値に、人から商品へ移行したことを読者と一緒に再認しようと言うわけだ。ここでは自然言語で解説されるのだから，“もはや理解できないとは言わせない”と凄みを利かされている訳で、それでも躊躇するならもはや理性的存在者とは見なされない（奇跡信仰者と同類の）呪物拝崇 fetischismus に分類される憂き目が待ち構えているという段取り、もはや物象化論から逃れる道は残されていない仕掛けなのだ。それでもこのメタ物語は一体何のために？と問う者がいるとすれば、それは聖母が神の子を受胎したというのに精霊 Geist の存在を理解しない不信仰者、fetischismus にでも食われてしまえばかり一蹴されるのが落ちだろう。

（四）「貨幣の資本への転化」および「資本の生産過程」論の虚構性

比喩的に表現するなら「価値」概念はCEO、それに対して「資本」はさしづめ最高執行役員COO（価値が超越論的「実体」性を「論証」された形態・存在・概念であるに対し、資本は“単なる実体”、超越論的論証 demonstration を欠く単なる抽象的普遍の logical fiction に過ぎないから、この比喩とて見せかけの fallacious にすぎないことを示すのが本章の課題となる。）、「価値」の「主体」化とCEOの意識に浮かばない自社清算・自己崩壊の演出がその任務となる。金の謎解きを数学モデルに転換・翻訳しようとした者はいないこと、それは価値論の形而上学的性格を間接的に証しているが、資本概念も同種の方法がとられることが予想されよう。確かに価値の自立した形態で有る貨幣を起点に、単に流通において自己を維持する価値形態ではなく「自ら運動しつつある実体」、「自動的な主体」として資本概念が提示されるとき、誰しも「自己増殖する価値」と規定される術語は先の価値形態から展開・「分析」される形式と観念するであろう。

もしそうだとすれば数学言語への翻訳は不可能であろうに、実際はそれとは逆に「資本の生産過程」と題された分析に登場する「貨幣の資本への転化」物語——「剰余労働時間」の検出で利潤タームを用いずにその生みの親 Capital の生成を説明——は、「マルクスの基本定理」と称されて人口に膾炙するほど数学言語に翻訳〔言い換えれば侵食〕されているのであって、こうした事実は「資本生成」物語がメタ言語 (logical & meta-physical fiction) による分析、言い換えれば「価値形態」として資本が扱われていないことを予想させる。価値形態なら自然言語への転換は不可能だからだ。

どちらが的を射てるのか？ 著者が「自己増殖する価値」を occult Character と断じ、またしても謎解き問題があると告げるとき、超越論的仮想空間における出来事が問題にされているように見える。他方、実際に「自己増殖する価値」が論証される場としての「貨幣の資本への転

化」論に目を向けるとき、そこでは“資本は流通からは生じないが、生産過程一般からも生じ得ない”と矛盾概念が用いられ、その解決として「資本の生産過程」という流通を媒介する生産へ移行するという筋書きになっている。商品・貨幣流通が「交換過程の矛盾の解決」として語られたことを思えば、これは（物象化論で見たとおり）商品「価値概念」発生史であって現実の発生過程ではないのにそう思わせる仕掛けであり、したがって矛盾論自体は証明に何の役割も果していないことを考えるとき、（本当に矛盾なら人の知性で解決不能。ここでも、先に「概念的把握」のまやかしを批判したキュルケゴールが“矛盾”概念を“科学の方法”としてではなく超越的な人間存在—精神—に空けておくのは誠実だ。）果たしてこの見せ掛けの推論が「価値形態」としての資本概念それ自体の「展開」ではなく、自身が軽蔑する分析者の判断でないか疑義を起こさせるに十分である。

以下に見る「資本の生産過程」が「価値形成・創造過程」であるというなら、リンネルに倣って資本が自立した主体として、“私には生産過程は価値形成・創造過程に見える”と言い、商品が貨幣に貨幣が価値形態に変容した如くその成果を見せねばならずそれが仮想空間における「論証」の中身であったはずだ。果たして資本に自己「分析」する自己 Das Selbst, 自己意識はあるのか？「自己増殖する価値」の「自己」とは何（誰）の「自己」なのか？資本語も持たぬ身では自己を展開・分析しようにもできない相談ではないか。（労働を「非資本」と見なしてその支配、それとの抗争から資本概念を運動主体として実在させようとしたことなどを思えば、資本概念が価値形態で有ることは必要でないともいえる。（『賃労働と資本』、『批判要綱』⁽⁶⁾）

「自己増殖する価値」は仮想空間に所属する概念（=存在）かそれとも「可能的経験」に所属する実在的「観念」か？前者なら価値形態であり後者なら価値形態ではない。「自己増殖する価値」（テーゼSとする）は自己運動する主体、時間軸を未来と過去に無限に伸びる deus ex machina, 無限にして自己原因、無限者にして“自ら有るもの”、すなわち絶対者（スピノザの神にしてヘーゲルの絶対精神）であるから仮想空間の住人・「価値」の資格をもつ。

しかしその特殊形式として提示された資本の一般範式 G-W-G がテーゼSを裏切る。なぜというに W-G ではなく G-W から出発した途端、G は「使用価値」に関心をもつ普通の購買手段となり、価値の形態変換 Metamorphose として運動するのではなく、ここでは価値もその「自己」、主体としての自己意識も存在しないしその必要もないからである。（皮肉なことに、神通力を負わされた「価値」には、通常の知性に見える質料は“見えない”のだ。「神達には象しか見え^{かた}ないから、あなた（ファウストを指す—引用者）は見えない。」—ゲーテ『ファウスト』（森鷗外訳）第二部、第一幕におけるメヒステレスの言葉）この検証一つで先の問題はあっけなく決着がつく——テーゼSは価値形態ではないと。価値形態としての貨幣は価値の an und fuer sich Sein, final form であって、他者・外部から力が働かない限り「等速度運動」を続ける慣性の法則のように、流通すなわち自己内変容に満足して他者へ転化 Verwandlung などしない。テーゼSは打ち出の小槌・金の卵を求めて放浪するボヘミアン、商品に寄生して命を接ぐ形容詞 kapitalistisch の位格、資本家的商品生産 kapitalistische Waren-Produktion の主体として人格を支配する怪力の持ち主ではない。そうだとすれば資本の舞台は仮想空間ではないし、価値が「可能的経験」の舞台に降臨して資本の実体を演じる場所でもないことになる。

価値は超越論的実体相形（概念=存在）、絶対精神の分身として人間目的を実現するために派遣された贖罪の子羊（Demon にして Christ）、自身も知らない前史を終結させるべき「予言」を額に

刻んだ Triple-Standard であったが、一度、資本が価値形態でないことが暴露されると、資本にはもはや絶対精神の意を託した分身として予言する okkulte な神通力はない。これは批判体系の存亡にかかわる事件といわねばならない。言い換えると資本がもはや自己について語らないとしたら、『資本』は「資本」論、資本以外の他者・分析者が“資本について語る”仮説でしかないからである。これは自身が蔑する分析的な精神（命題①）による説明、説明を“無概念的 begrißlos”と揶揄し事象の本質把握を指示する“概念的把握” begreifen の破産ではないのか？ 価値と共にそれを派遣した絶対精神も舞台から退散した後も価値形態としての「資本」概念を語るのはアナクロニズムではないのか。

次のような反論が寄せられるであろう。テーゼ S に含まれる「価値」や「自己」が価値のそれでないというのは貴方の誤解であって、貨幣が「価値の化身」Inkarnation であることは論証済みのこの時点では、自己や価値は一般範式 G-W-G 全体を指しているのであって、起点にある G のそれを指しているのではない。意識的に metamorphose と転化 verwandlung は区別しており、「交換の矛盾」と異なり“貨幣の矛盾”から概念の自己展開によって資本概念に到達できないこと、貨幣は自己に留まる限り不妊的で異界に身を投げる限りでしか増加できないことも了解済み、したがってテーゼ S の批判から“資本は価値形態ではない”とする貴方の判断は当たらないと。

先の Fetischismus 批判同様、貨幣の購買力の原因（「人間労働の結晶」）の是非が問題ではないのだから、範式の G が使用価値の取得にしか関心を示さない以上、それはただの交換手段であって仮想空間に有る価値形態でないことは動かない。それが、価値形態ならば、自ら“現実的抽象”とも表現した如く、使用価値は存在しないも同然だからだ。

そこで従来の価値・貨幣規定を超える謎解き問題——増殖 Vermehrung ——を検討してみよう。（謎解きに固執するなら、聖トマスが利子の決疑論において利子の原因を時間に指定した上で、時間の所有権は神に属するが故に高利の徴収を違法と判定した如く、神に代わる超越論的主体の登場は欠かせない。）

実体 inertia なしに（質量と加速度すなわち力なしには）運動もないから、テーゼという自動機械が自己の目的を実現するために実体を捜す旅 Wanderung、先にテーゼの意思と目的が仮定されそれを立証するために内容・素材が調達されるという段取り、G が自己運動の起点としてではなく過程を統括する超越者によって動かされて成立する「資本」創生物語だ。これは結論先取の詐欺 magic、なぜというに、この“唯物論的”物語は超越論的皮袋に非超越論的・実在的内容を盛ることによって、超越論的概念の実在性を演繹せんとする“新しい存在論”だからだ。しかるにテーゼ S の統括者はこの範式 G-W-G では不在であり、したがって範式は「自己増殖する価値」を表示してはいないのだ。

それでは擬似商品の「価値創造 Wertschöpfung」能力に一切を託すとも言うのか、しかしそれは以下の疑義に出くわす。

商品が「価値」物であるためには、「資本の生産過程」が「価値形成過程」である必要はない。主体的表現に言い換えてもそれは「価値形成的すなわち価値の源泉 Quelle」（Werke, s. 203）にすぎないし物理的・工学的過程を終えて市場に出荷する段で定価表をつけるかあるいは正札なしに市場の相対取引に任せても、欠陥商品でない限り立派に商品になれるからだ（支出国民所得 GDE

からGDP「生産国民所得」を推計するようなもの)。してみるとこのテーゼ——「価値形成論」——は二重の錯誤に立脚していることになる。

① 超越論的価値概念によって労働が商品価値の実体であることを証明したのだから、「人間労働は価値を形成するけれども、価値ではない」とする言明も「価値対象性」についての説明のときは正しかったにしても、前半部分が事実判断の命題——「人間労働は価値を形成する」——として単独に主張されれば、それは“労働過程は労働の対象化である”とするトートロジー・無意味な命題に変換する以外知性には understand 理解されえないし数学モデルがそれを証明する。数学言語に変換された途端、価値は労働と区別できない tautologie, 言葉の問題・定義に解消され、実質上「価値概念」消失するのは、数学的知性が理解しようとするれば鵠的概念は労働に還元される他ないからだ。

事実判断として生産を「価値形成過程」⁽⁷⁾、労働を「価値形成的 bildend」と言われても理性は理解できない。生産や労働は抽象的とはいえ表象可能な観念なのに述語の方は超越論的世界に属しているからで、知性が精一杯努力した結果が労働＝労働という tautology なのだ。この似非価値論が事実判断の装いをしているため人口に膾炙して「価値法則」の首座に躍り出たのであり、著者自身もこの誘惑に勝てないばかりか推奨すらして俗説の普及に加担したのだ。（ケーゲルマンへの手紙）いわゆる“歴史貫通的”な価値規定からしか「自己増殖する価値」を演繹できないことこそ、それが超越論的価値概念の“自立した形態”でないことを確認する。「資本の生産過程」論はゴスプランの資源配分・時間計算と瓜ふたつ、特殊歴史的形態規定とは無縁の代物だ。この問題は体系の始原問題として最初に考察した主題そのもの、分析的判断では労働一般は“商品を生産する労働である”とは主張できなかつたことに帰着し、にもかかわらず舌の根の乾かぬうちに商品生産としての「資本の生産過程」は「価値形成過程である」とする主張が事実判断であるかのごとくまことしやかに持ち出されるのだ。これは論証も反証もされない代わりに無意味な命題、言い換えれば言い放なしの一人ごち、リカードならまさに“発想だにしえないこと”だろう。

② 労働力商品を「価値創造」能力の保有者と説明するのは、先の誤りの繰り返しに過ぎない。というのもこのテーゼは「増殖過程」を「形成過程の延長」と説明するための小細工とはいえ、生産過程を労働過程へと主体的形容に変換しただけのことで、労働過程は労働の支出であるとする先の主張と同じく無意味なトートロジーに還元されるからだ。「資本の生産過程」を骸骨のような「価値形成過程」から解放することは、商品の付け値や利得計算の前に売れ筋商品を構想する企業者からすれば、無味乾燥な時間計算物語から富を生産する労働過程を奪還することでもあるが、それによって「資本の生産過程」物語自体も舞台から引き下がるのだ。悲惨な労働現場の現状分析も——絶望の哲学でない限り革命もラディカルな改良となろうから——市場の事実 facts を「資本」の支配に組み入れた形而上学的経済学原理、経済学批判体系の構築を肯首するものではないのだ。

小括

「自己増殖する価値」⁽⁸⁾にとって fictitious な「価値形成過程」や「価値創造能力」は何の効き目もなかった。人間の顔をした統括者 capitalist or entrepreneur を登場させない限り決着はつかないことを見越して、台本にはちゃんと人が範式的意識的な担い手 “bewusste träger” として

登場させられているのであって、交換当事者の如き価値の傀儡ではないこと（ただし、この“意識的担い手”も実在の企業者ではなく単なる logical fiction、現実の企業家なら販売価格を予想・与件としてコスト計算をするからであり、正常利潤を含む市場価格を労働時間の加算 adding up から演繹するのではないからだ。）、いいかえれば役目を終えた価値概念に生産過程を差配させようと無理やり連れてきても、それは興味も関心も示さずそっぽを向かれ筋書きの変更を余儀なくされるのだ。

超越論的「自己増殖する価値」概念を新たに繰出したものの、この概念が形態論的「分析」なしに直接「可能的経験」で始動するべく己の分も弁えず現実界に降りてきたのが躓きのもと、超越論的概念が機能不全に陥ったのだ。人が資金や資材を用いて商品を生産するのは人が概念・カテゴリーを用いて判断するのと同じこと、商品・商品生産・商業社会・市場があるのと同じ意味で、資本概念が“資本主義”として有るわけではなく、Capitalist Society は人の理性と想像力、情念あつての事象なのだ（割引 discount 観念、時間の観念のない労働経済を image してみれば…）

補論①

資本家的生産様式 Capitalist Society を「資本」の支配と描くのは（『資本の時代』ホブスブーム）、貨幣の絶対的購買力と貨幣愛さえあれば価値概念などなくても十分であつて、資本が「価値魂」として有ることも必要なく、ブルジョアが貨幣欲に導かれて生産に狂奔している様も文学的にも風刺的にも叙述することは可能であり、貨幣欲はまた名誉・権勢・支配欲といった経験学的人間学の内容をなす人間模様と融合して存在しているのだから、人格抜きで価値が指令しているわけではない。「自己増殖する価値」こそ価値の本命とばかりブルジョア憎悪癖を詩情豊かに匂わせながら演じているのは価値の仮面を被ったシェクスピア張りのシナリオライターであつて、価値はもちろん begrifflos 概念不在の資本自身も何も語ってはいないのだ。メタ物語の幕は下り、資本の額に刻まれていることはもはや謎解きではなく自然言語で解読可能だから、読者は“資本は頭のてっぺんから足のつま先まで、血を滴らせて現れる”と呪われた口上を聞かされても、その真偽に関して今度は自分の目と頭で十分判断できるのであり、物象化論におけるが如き叱責を受けなくてすむというわけだ。

マルクス自身、モノ・事象としての資本が自動主体でないことを承知しておればこそ（それを記述するのがブルジョア経済学だから）、なんとしても（無理を承知で）okkulte な威力を発揮する唯一の超越論的概念・価値形態を資本規定に取り入れたかったのだ。そこでロドスとばかり飛んだのだがそこはロドスではなかったのだ。これは「貨幣の資本への転化」および「自己増殖する価値」の fiction が被らざるを得なかった宿命だ。

価値に見放された資本はいまや自分の力では自分自身を生成・「論証」することはできない。飛べないのだ。しかしあくまで飛んだと強弁するのなら、事態は一体誰が wer immer 飛ばしたのかと聞き返しうる地点 problematique に、事実問題から権利問題の地平に配置されているし、その上で初めて“どこへ wohin”と聞き返すことも可能となる。どこかに金の卵が転がっていてそれで目出度く着着というようなお伽噺にはいやしくも啓蒙の精神なら自戒せねばならない。マルクスに忠実な宇野理論が解した如く、“形態から実体へ”飛ぶのではおとぎ話に変わりはない。流通から生産過程へ飛んだのではなく、超越論的地平から「可能的経験」の世界へ、ただし Geist 価値の世界から fictitious な Person・企業者のシナプスの中へ飛び降りたのだ。

現実の生産が企業者を必要とするのは抽象的利得計算もさることながら、市場の目に適う多彩な商品を構想・企画して送り出すことで、これこそ「使用価値」から切断された価値概念が取って代わることができないことなのだ。生産自体は生産工学・管理の領野であって、価値は光を照射されたメフィストテレス同様、五感漂う世界では生きられないのだ。

流通は制覇できたのに何故生産はできないのかと訝る向きもあるとすれば、生産は謎解きを仕掛けて超越論的世界に引きずり込もうにも金のように価値の征服に身を委ねてくれなかったのだ。というのも、テーゼSの任務は生産過程を占拠することにあるのではなく、具体的労働過程を捨象して抽象的アルゴリズムに解消すること、そこは超越論的自己も主体も不在の、質料を欠いた単なる分析者による（労働）時間計算、強いてその実在的根拠を持ち出すとすれば、私有財産の特殊歴史的形態も捨象され、かの“経済計算論争”の topics となった“価格抜き”の労働配分計算、したがってその主体は「資本」どころか絶対的 Commander にこそふさわしい topos なのだから。

価値は見事に流通を制覇してくれたが、今度は本丸生産過程の征服はCOO格の資本の出番というのが批判体系のシナリオだったはずだ。流通の征服はリスクが少なかったから成功というのではなく、商品が自分で歩いて出かけていくという常識を絶する超絶技巧を要したこと見てきたはず、流通が一人歩きするなら生産がそうできないはずはないと、特殊な似非商品を構想した段階で見当をつけていたに違いない。しかしこの誤算・過信の元は、リカード派社会主義の改革を蔑した点にある。超越論的価値概念は「等労働量交換」の事実にとりつかずして価値通りの交換からそれを演繹する離れ業をやってみせたが、「労働の価値」の過少支払いと直観された価値収奪は、比喩的に〈不等価交換〉と形容されることはあっても、それ自体は商品価値流通とは無縁の分配関係であるから、用語を「労働商品の価値」に変更したからとて事態は変容すべくもない。どちらの場合でも、事実認識として等労働交換はいうに及ばず不等労働量交換を検証しているのではなく、利潤の存在から逆算して〈不等価交換〉を推量してにすぎず、プルドンの場合なら、分業と協業の全体的効果が個々の労働者の賃金に反映されない不正義を告発して労働者の生活と尊厳を維持・防衛しうる自主組織の構築を展望しているのであって、商品流通の「正義」は安泰だ。マルクスが、商品価値とは無縁の分配関係を Wort-Spiel で流通に擬制した上で、更には「生産過程」にまでなだれこんで「自己増殖する価値」の fiction に血祭りをあげるのは、そうでもしなければ商品生産・流通（ゴルジョワ的正義）を廃棄する「主体」を示せないからにすぎない。

ここに来て科学的経済学かどうかの turning-point と自賛した、自然的要因を排除し微塵のそれも含まぬ社会関係に「労働」を抽象したことが反旗を翻す。というのも労働/生産は人と自然の質料変換 Stoff-Wechsel であって事象化した社会関係すなわち価値形態の形態変換 Formwechsel とは無縁な世界、というより価値の自己が躍起になって商品の自然を否定・排除して自分の世界を構築したのではなかったか。ヘーゲルの自然を精神の an sich と見なす体系でもない限り、今更自然を精神の外に放擲する唯物論の立場では自然との質量変換を形態化・「同一化」することは適わないのだ。

で、どうなったのか？ 価値が具体的労働に見向きもしないというのに「自己増殖する価値」 sich Vermehrungswert はその征服に意欲を示すというアナクロニズム、これが特殊な商品の投

入で和解・決着に至ることはありえない。この矛盾の解消は超越論的価値概念を諦めるしかないのは目に見えている。価値概念を喪失したテーゼSはもはやSで有ることもできないからだ。これは批判体系の瓦解を意味しようが、これだけの犠牲をはたいて一体何が残ったのか？ これらの騒動と無関係にある実在の労働過程であり、これがこれまでの主役——形態論に替わって首座に着かなければ、とにかく富の生産とその増大すなわち富裕 opulence の進歩ないことにはテーゼSは生きられないのだ。しかしそこは骸骨のような「価値」の世界ではなく、“富の価値”の世界、色なす商品群の生産を要素投入＝費用発生＝所得形成という三面等価の視点から人が概括した「付加価値」額の世界であって、「価値形成過程」＝「資本の生産過程」なるものが実在するのではない。ここに来て価値と「自己増殖する価値」の離反・決裂は決定的となる。価値が自然的要素を排除したのは仮想空間における出来事、いまやSは現実的時空の労働に寄生して自己の実在証明を図ろうとしているのだから。でも、どのようにして？「価値形成」論は労働＝労働というトートロジーの記述に過ぎないとすれば、その時間直線に切り目を入れあるいは「延長」して「形成」と「増殖」の名前を付したところで、それが「資本の生産過程」に変容するべくもないではないか。

補論②

人の知性は利子を利潤に還元してとっくに謎解き問題から解放されているのに（割引の観念）、マルクスが中世の亡霊を持ち出してまるでドン・キホーテのように突進してるのだ（フローの国民所得計算において金融機関の貸付利子相当額が二重計算を避けるため、GDPから控除されていることはその例証と見なせよう）。

それにしても、資本家的生産様式において「資本の生産過程」を見渡しても、事象が主宰する自動過程、資本家や労働者がその傀儡としてしか存在しない存在者—— Monster は存在していない。对象的・現実的存在者としてシステムを管轄する主宰者——「資本」・「資本主義」——なるものこそ fiction なのだ。Das Kapital も資本が自己を語るなら、タイトル通り『資本』だが、「資本」が分析者によって語られる限りその存在と概念は分裂し、事象それ自身の概念の生成は挫折しているのだから、タイトルも通常の形式—— Principles of …, Essai sur …, Der Grundsatz von dem Kapital に戻さねばならぬし、もともと意味不明な第一巻のタイトル Der Produktionsprozess des kapital s も変更が必要だ。一度リカードの『原理』にまで帰還することが肝要で、彼は次のように言っていたからだ。

「商品Aの価値はX労働時間である」とする主張はナンセンスしたがって誤りであり、交換比率は投入・雇用労働量に逆比例すると原理を主張しただけのこと、観察される事実に基づき体化された労働量から利潤を演繹したわけではない。比較生産費説と名づけられた外国貿易論は、資本移動の困難から「労働数量」価値説が適用できず、双方の貿易業者が利益を上げられるような rate に為替相場が落ち着くことを述べたものだが、利益については国内取引でも同様、原理如何にかかわらずそれが見込めなければ生産に着手しないと企業者の心内を忖度して語っているだけのこと、この企業者の見込み、risk と決意これこそいふならば“資本の観念”であって、物的生産過程に「資本」の秘密が潜んでいるという発想自体が、非アングロサクソンの、チュートンの“歴史の寵”の末裔なのだ。観念の自立を蔑する唯物論ほど「資本」の概念的把握に不向き

なものはない。唯物論が制覇した「自由の国」がいかなる光景と匂いを発散しているか、ニーチェの嗅覚を借りずとも…。資本は価値形態ではなく、モノでもなく、いうなれば企業家の頭脳に存在する観念、記号であり、人間学的に表現すれば自制と冒険、貪欲と騎士道、理性と衝動、信頼と猜疑、創造と破壊、過去と未来、PersonとPersoenlichkeit、自由と必然、Capitalist & entrepreneur、欲望が競争条里でひしめき合う complex、まさに「観念の冒険」（ホワイトヘッド）なのだ。

資本が「価値形態」でないと判明した時（価値の実体は労働だから）資本の“実体は労働でない”ことが宣告されたも同様であって、これがリカードの労働原理であってみれば、「価値形成過程」論が砂上の楼閣と称されても文句は言えまい。

やっと結論に近づいたようだ。

自分で自分の存在と概念を生成させるような「資本」概念—「資本」論ではない—「資本の生産過程」論ならぬ「資本の生産過程」そのもの、こうした概念=存在に立脚する資本家的 kapitalistische 生産様式、——事物の所有格 kapitalisch は存在しないのだから、これを“資本主義的”と訳すこと自体、物象化にポアされているのだ——俗称“資本主義”“Capitalism”（イデオロギを蔑するマルクスがこのタームを用いた訳ではない。）は字義通りの観念的 Bild・アイデアであって、現実には有るのは“great commercial republic”，強いて複合体で表示したければ資本家的商品生産 kapitalistische mode of production，要するに良くも悪くも人間 bourgeoisie が産業の initiative をとる bourgeois society, Civil Law に規定された財産，制度であって“資本主義”が人工国家リバイアサンのように君臨しているのではない。領主が土地を所有するのではなく土地が人間を緊縛（所有）する”と弁証法の妙を楽しむ閥を越えて，“資本主義”なるものが実在してそれを“発見”したのがマルクスの功績とばかり大真面目に素朴反映論を振りかざす唯物論のいい加減さ，命題が命題自身を論破していることに気づかぬ馬鹿さ加減については言葉もない。形而上学的言説が生き延びているのは、それが積極的に自説の真を証しているからではなく事実を挙げて反証されえないというその性質に拠るに過ぎない。

結びに代えて

「特殊歴史的」規定性は超越論的価値概念に依拠しているのだから，“資本主義”に超越論的メタファの「解読」でこそ可能な将来社会の託宣 magic，人間の意志を超えた「自然史的過程」，「前史・本史」史観を適用することはできない。商品生産が前史——本史の仕分けになるのは、それが事実（判断）から帰結することではなく超越論的価値概念に依拠してのことだから、そこから現実のブルジョア社会解体論を引き出すことはできない。（ブルードンとのコントラスト）階級闘争の事実からそれが最後と超越論的価値概念に付帯する史観を盗作するのも許されない。“最後”どころか安住した途端“裏切られた革命”に変容してしまう永続革命の宿業。

言語と貨幣を用いて生きる自生的秩序は特殊歴史的ではあろうが、それを前史というなら本史とはそれらを廃棄した完全=無「言語」無「貨幣」の世界、自生的秩序が家族とリバイアサンに挟まれて実存していたとすればそれは無「家族」「国家」、それが自然的欲求の充足と自然と協調するものなら非・脱「自然」、必然の国なら絶対者「目的・神」の国、これは人と自然、人と人との和解ではなく自然・自然人のいない virtual reality，反神学のみならず反自然——“人間中

心主義”の hypochondria, 世界（自然と人間）を廃棄するパラドクスではないか。

絶対精神は狂気に乗って世界を我が物に自然と人間を和解させて満足したとすれば、唯物論の狂気はその「転倒」によって同じく世界を我が物にしたが、それは両者の和解によってではなく人間的自然の廃棄によって成し遂げるのだ。どちらの心性が persönlich それとも schuldig であるか、形而上学は善悪どちらにも役立ちそれは用い方次第だとするカントの擁護論と形而上学を弁神論と見なす無神論・唯物論の狂気のどちらに棹差すか、それは読者の自由裁量だ。カントの〔定言命法〕でもルソーの〔一般意思〕でも実現すれば人が消え、実践理性など存在せず有るのは利己的 demonisch な盲目的意思だけと断じて自然状態だけ残るとすれば、Den was ist der Mensch? 人は“克服さるべき存在”だとしても、克服してしまえば人の次元を超克してしまうのも人間なのだ。

内乱の絶えないヨーロッパでは聖哲の政治学 Politicon 以来2千年を経て平和の使者としての Politics が実学の最上位を占めたが無残にもその期待は裏切られた。politician とて statesmanship の体現者ではないからだ。戦争が政治の延長なら政治は経済の延長、公共 public 公共のもの re-public, citizen を意味する政治経済学 political economy も、富の増進を通して信頼・平和に寄与すると同時に羨望と脅威をかきたて平和を破壊する原因ともなる。それでも人は手段であると同時に目的であるとする理性の命法を実践するのが politics だとすれば、経済学も同次元にあるのであって、経済行為を基底に据える振りしてそれを手の届かぬ必然性の領野に押しやってはならぬ。必然性とは神の言葉 logos, それを自然に被せて経済学を人の意識ら切り離し政治と経済を切断してはならぬ。

絶対は転倒されえない。絶対精神が内容から見て巨大な唯物論だとすれば、形式から見た唯物論は絶対的観念論である他ない。教祖が apostle のドグマを見て見ぬ振りしたのも、そうでもしなければ自己の形而上学を労働者に浸透させえなかったからだろう。（『資本』第二版、後書き参照）マルクスその人も絶対精神の殉教者 Donner とはいえ最後の階級闘争と capitalism の自壊は叡智者の透見と啓示 apocalypus によるというよりはマルクスの自作自演、それは必然性とは反対の if の重なる偶然性が渦巻く次元の出来事であるにも係わらず、自身が「自然必然性」と強弁して弟子に革命事業と観念させたのだ。東洋の精神に戻せば、“最後の”闘争どころか人民が飢える限り天の命令が下される天誅、繰り返される政治闘争・政権奪取・交替劇にすぎない。

※追記 『阿片常用者の告白』（1821）を著した Greek philosopher のド・クインシーは、リカードの天才的分析に魅せられ、闘病中に『政治経済学の論理』（1844）を著した。小論はマルクス「価値論」の“アヘン”を吸った筆者のささやかな闘病生活を綴ったもの、敬愛する置塩信雄先生が生前、内留中の筆者に“君、フッサール知ってるか”と尋ねられて“知りません”としか応じられなかった慙愧の念への遅まきながらの自答でもある。先生は数学モデルと“事象それ自体”の差異を意識されていたのではないかと勝手に忖度した上でのことであるが。

注

- (1) 佐藤茂行『ブルードン研究』（木鐸社、1985）を参照されたし。
- (2) 自然・神・人間三者の攻めぎあい、神が単独で世界（自然と人間）を包摂・領有する場合や人間が自然と tug を組んで神を放擲、さらには人間が単独で世界の主座に着くなど、さまざまな形式が存在するが、自然と Spirit が人間の Soul の領有権をめぐる抗争としても描くことが可能だ。Ernst

Cassirer, *The Individual & the Cosmos in Renaissance Philosophy*. tr. by Mario Domandi 1963 (原典は1927年)。

- (3) 今日、物象化論の賛美者の主流は、マルクス教の信者〔アルチュセール派を除いて〕ではなく、この“見えないもの”の読解という *problematique* に引かれるイデオロギー——現象学、解釈学、深層心理学、言語学、脱構築・ポスト構造主義等々——だ。

彼らは神の死に安住して不安もなく、ただ「有る」もの Ding にまで収縮してひたすら肯定的に生きる啓蒙の“人間主義”——この彼らの軽蔑する近代思想に対する *anti-thesis* として、この人間主義のイデオロギー批判を突き抜ける根底的な思想であるがゆえに、思想を超える“事象化・構造化・存在化”した思想、メタ言説として、先の“不可視”の *fantasma* と合わさって、信仰に近い讃歌を贈るのだ。それが仮想空間における出来事であることは、それが内包する篡奪された人格の回復が平板な人間主義の回復に過ぎない革命になるであろうことを見越せるだけに好都合であり、*virtual reality* に於ける事象である故に“永遠の否定”の様相であり続けることも出来るからだ（『否定の弁証法』を著したアドルノが物象化論に一目置くのも、明晰な『情念論』で知られる中村氏が“西田哲学は心理学的分析に留まっただけで、物象化論のような体系を欠いている”と批評するとき、ヘーゲルとマルクスの形而上学的類同性の指摘など些細なことに過ぎない。（中村雄二郎『西田哲学の脱構築』岩波書店、1987）

神の死がもたらしたものは、それは自由でもなければ絶望でもなく、神との緊張を失った物分りのよい人間、そうした状況下で貨幣・資本物神批判は反逆のメタファ、否定の *symbol* として歓迎されるのであって、仮想空間における出来事を真に受けて物神ならぬ現存「資本家の生産様式」廃棄のメッセージと受け取るような *dogmatist* とは一線を画しているのだ。サディズムであれなんであれ、狂気を締め出す既成秩序・権力に対する *anti-thesis*、反逆・否定のメッセージであることに変わりはないのだが、物象化論は単なる思想——哲学・解釈学・〔深層・無意識〕心理学——を越える構造化されたメタ言説として他の思想に一目おかれるのだ。西田幾太郎がヘーゲル没後100周年記念として開催された世界ヘーゲル学会に合わせて執筆した論稿の一説を中村氏は紹介している。世界の究極因は精神であるとするヘーゲルの哲学は思考を究めつくしていない浅はかなもので、根底に有るものは精神ではなくもの・事物であると言わねばならぬと。これを唯物論者に棹差す言辞と受け止めるのは早計である。“有無の無も有”と竜樹をはじめとする原始仏教研究から引き出した和辻哲郎を持ち出すまでもなく、ものもその概念・観念なく裸であるわけではないから、西田の批判自体がヘーゲルを肯定する結果を招来する。西田がこの *paradox* を避ける道は唯一つ、ヴィトゲンシュタインに倣って言葉にしないこと、テーゼを提出しないことだが、かくして問題自体が世界から消失する——何が世界の根源かと問うこと自体が。これが東洋の無、西欧合理主義・言語表示を超える絶対の無であるかどうか、それはその何性は規定されない有、*Etwas, X*, 物自体であって無ではない。絶対的無を理性は規定できないとはカントの批評だ。

- (4) 日本の哲学史上、画期的快挙と思われる『西洋哲学史』〔上下二冊、タレスからレヴィナスまで全30章、2006〕を上梓された熊野純彦氏はその列伝に「批判知の起源」の項目立てでマルクス（ヘーゲル左派と二チーエに挟まれて）を加えられた。（これは極めて珍しいことだ。氏が解題を寄せた和辻哲郎の『倫理学』に登場するのは訳が違ふ）そのプロローグに先に「交換過程」から引用した文章——「かれらは、それをしらないが、それをおこなっている」を掲げられている。ヴィトゲンシュタインの「語りえぬもの」と連動していると思われるが、ここにも物象化論が（広松神話も関係して？）影を落としている。「ヘーゲル哲学のすべてはおそらくあやまりである」と言い切る一方で（これは「絶対精神」の形而上学も現実に引きもどせば *fiction*，“真 *real* の言説ではない”解釈物語と取れば当たり前の批評で“おそらく”なる保留なくとも通用しようが——人は面倒を避けて挑発的言辞を吐かないだけだ——ヘーゲルの弟子でもあるマルクスを物象化論ゆえに免罪するやり方には賛同できない。氏は「ヘーゲルの思考が不可能であるところで、哲学はそれでも可能なのだろうか。およそヘーゲル的でない哲学がありうるだろうか。そう問いかけたのは、フーコーである。」——引用

でマルクスの項を閉じているから、これが先の批評の「おそらく」を挿入した理由でもあろうが、これでマルクスとのバランス感覚は回復され、氏の学知の健全さを表している。フーコーの『知の考古学』も反人間主義・反ヘーゲルをモチーフにして成り立っているが、既存の知の営みが見落としていた視点を回復する作業が中心にあるから、反対はせぬまでも物象化論に入れ込んで否定的なものから得られる fantasuma に酔うには地に足を張りすぎていると思う。

- (5) 正直な合理主義のエンゲルスは、価値概念の存在理由を人が商品に体化された労働時間を直接知ることができないから (deren Zeit mir unbekannt bleiben) 「価値」概念の「回り道」をする、という風に形態論の教説に従って解説する。(『反デューリング論』) 価値概念の存在理由からすれば、最初から人の認識能力の査定など眼中になかったし、人抜きで論証することが課題だったことを思えば、この叙述を許可した当人は schuldig といわねばならぬ。

“知らないがそう (心理学なら “前意識”・無意識) する”，とは誰の判断なのか、と天才の所為にせずには問うてみれば、その可能は人の認識能力に起因するものではなく形而上学的思考の託宣のなせる業であって、したがって人の直接的認識の可能・不可能はその能力とは無関係であることが即座に判明するであろう。超越論的論証を事実判断と解するなら、「資本の生産過程」に於ける「価値形成過程」も、資本概念ならぬ分析者の判断に過ぎぬのに“人の知らない”過程となってしまう、実際は数学言語に翻訳できる事実判断でしかない似非「資本」論を、逆に超越論的記述に転換するアナクロニズムとなろう。ヘーゲルの“形而上学的論証を”どうしようもない”代物と見破って自然弁証法を論じた当人が、“剰余労働ではなく剰余価値の発見によって、マルクスの天才は経済学を科学にした”と講じるとき、エンゲルスの面目は丸つぶれである。

- (6) 『要綱』に於ける資本の規定については、角田修一『ヘーゲル論理学と資本の概念』(大月書店、2005) 参照されたし。
- (7) 「価値形成」論の市場の事実との不突合は、粗付加価値・総販売価額中の「固定資本減耗」扱いで頂点に達し、減価償却引当金相当額は「価値形成過程」と並存する労働過程で実際に体化された労働量を生産物に移転し、したがって「価値形成過程」で形成された粗所得を償却費・企業者所得・雇業者所得の三者に割り振る際、償却費は省かれることに現れている。企業家は販売額の内から償却費を控除する必要がなく、販売額とは別個に労働過程から移転した「価値額」が舞い込んでくるかの処理法で、価格形成に加わらない地代が資本家と消費者、すなわち社会に「転嫁」する「虚偽の社会的価値」と呼ばれることとは桁外れの非常識である。「シーニアの最終一時間」説と銘打たれ、時代が時代だけに世間の耳目を引いたこのテーマ、マルクスに批判的なマーシャルも『原理』で、労働価値説に関心のないシュンペーターすら、アメリカ国民を対象にした野心的な作品 (best seller) 『資本主義・民主主義・社会主義』の中でわざわざ注記してほどだ。後者は全面的にマルクスに賛意を表し、前者は命題の中身には触れず、駆け出しのエコノミストの勇み足をたしなめる形で、後に労働時間短縮賛成派に回ったことを述べるにとめている。2人の Great Economist が償却費の算定如何の前に、要素投入＝費用発生＝所得形成の三面投下式会計原則で生産を把握しており、したがって古風な“歴史の寵”の匂いすら漂う「価値形成過程」論に興を示さず労働時間短縮の道義的価値に焦点を当てたのは当然であるが、マルクスの意図が論証途上で海のものとも山のものともわからぬ仕掛け品——「絶対的剰余価値生産」——を検証する絶好の場としてシーニア教授の利潤論に戦いを挑んだというのが真相とすれば (仕掛け品では検証の対象にならないのに)、この2人のコメントは私の批評には中立的である。この点については、拙稿「経済“価値”論と共産主義」(基礎経済科学研究所、2011・3)、を参照されたし。

- (8) この「自己」、マッハが「物自体」に目もくれないのと同様、マルクスの形而上学的方法は一切無視してつまりりカードに還元して理解する positivist シュンペーターが言及だにしないものだが、この自己の位格は価値概念と同格である以上、盲目的自然・モノ Ding の自己でもなければ自己意識の自己、絶対精神でもなく、まさに神と自然の中間物たる自然人 person、いいかえれば自生的秩序に生起し純粋理性の意思ではない自己意識レベルどまりだから、先に「価値の額に刻まれている物」の読

解が価値の能力を超えた絶対者の意識——「自然的・歴史的必然性」であると述べたことに相当する。ヘーゲルの方法と体系なら、この範式の自己はそれを自己のモメントとして睥睨する自己の自己によって絶対精神に統合されるのだが、唯物論的転倒の場合、絶対精神の体系を拒絶する以上体系の *an sich* が欠落するため、特殊的自己意識としての価値や自己増殖する価値も、上向し帰還する *an und für sich*, *syn-thesis* がなく宙ぶらり。アドルノの言うように「否定の否定」ではなく「否定」だけがあるのだ。

価値は自己の処遇を自ら決める自由な存在・概念ではないし、「自己増殖する価値」もそうだからこそ否定されるのだが、これではかつて自ら批判したプルドンの二項対立（テーゼとアンチ・テーゼ）と同じである。カントやヘーゲルの場合、中人たちは体系の主語たる純粋理性や絶対精神 *für uns* と同一（代理）人だが、マルクスの唯物論の場合、体系の主語たる価値や資本概念の“自立性”はモノや自然人 *person* 相当の特殊的定在で、それは止場されるのではなく現実的に廃棄・否定される運命におかれているのであってその判断を下す主体（作者）は体系の外に君臨しているのだ。これは学知 *Wissenschaft* の態度としては不誠実であり、それは今なおヨーロッパの知的風土がマルクスをプラトンと同列に祭ろうとも変らない。フォイエルバッハのテーゼに戻って敷衍してみれば、かの「実践」とは理論的实践に対峙する「戦闘的唯物論」のそれではなく、理論的批判が *Syn-thesis*（肯定）を欠落した *Kategorical* な否定、つまり絶対的な否定・無化を志向するが故に“実践的”否定・廃棄に行きつくが、その中味はラディカルな理論的批判、客観的事象の“自己崩壊”論となっているはずで主体的実践それ自体ではないのだ。